

赤水図で中学の授業

高萩市教委、顕彰会、地図学会

高萩市教育委員会と長久保赤水顕彰会、日本地図学会の3者は本年度、同市出身で江戸時代の地理学者、長久保赤水(1717~1801年)が作成した日本地図を教材にした中学校の授業の開発に、連携して取り組む。9月にも市内の中学校で出張授業を実施する予定だ。



大学教授解説 9月にも実施へ

赤水の「改正日本輿地路程全図」(赤水図)は本年度、初めて中学校の地図帳に掲載された。ただ、同顕彰会の佐川春久会長は「中学校の先生も(日本全国を測量した)伊能忠敬についてしか学んでおらず、赤水を知らないため、戸惑いがあるのでは」と話す。

現在検討している授業は、同学会常任委員長で日大経済学部の卜部勝彦教授が担当。5倍の大きさに拡大した赤水図を生徒たちと囲みながら、赤水図に関する解説や現代の地図との比較などを通し、生徒の地図を「読む」力の向上を図る。本年度は3校での実施を検討しており、授業をブラッシュアップする。同顕彰会と同学会は、将来的に全国の教育委員会や学校に情

報発信し、赤水図を使った授業内容の構築に役立ててもらいたい考えだ。

現在、NHK大河ドラマ主人公の渋沢栄一など幕末の人物に注目が集まっているが、佐川会長は「彼らの足跡をたどるには、今の地図では地名が変わっているため不十分」と指摘。江戸時代の庶民に重宝された赤水図で「歴史と地理を融合した教育もできるのでは」と期待する。

市学校教育課は「大学教授が授業を行うことで、生徒は郷土の偉人に対する興味が増え、功績について専門的に学べると考えている」としている。

顕彰会は本年度、授業開発のほか、漫画などの書籍の発行、赤水の足跡をたどるウォーキング会といった事業を計画。計画案の承認を諮る定期総会は新型コロナウイルス感染防止で中止したため、同会理事11人が15日、総会資料を会員(670人)らに発送する作業を、同市下手綱の市立松岡中学校で行った。

(小原瑛平)

定期総会の中止を受け、会員らに総会資料などを発送する長久保赤水顕彰会の理事 高萩市